

身近な草木花 10月

秋には、秋の花だけでなく、実も紅葉も見られます。それぞれについて見ていきます。

ススキ イネ科 花期；8～10月

秋の七草のひとつ。その花穂が動物の尾に似ているため、古く万葉の時代から尾花の名で詩歌に読ま



れ、秋を連想させる草として親しまれてきた。名は「すくすくと立つ木(草)」からという説があるが、語源ははっきりしない。また十五夜のお月見など、ススキは日本人の暮らしになじみが深い。ススキはカヤ葺き屋根にも使われたので、「茅(かや、萱)」とも呼ばれている。

ススキは山野のいたるところに生える高さ1～2メートルの大型の多年草。10号棟脇の陸橋を渡ったところ、旧タマタイム造成地、モノレールへ向かう歩道わきなど、至る所に見る事ができる。

(上) 10号棟脇の陸橋に生えるススキ (2016 10/2)

(下) ススキの花 2014 9/29

ところで秋の七草は“花”で選ばれている。風になびくススキの白い穂は花なのだろうか。疑問に思って調べてみた。右の写真は白い穂になる直前のもの。

ススキには花弁はなく、下に3個ずつ垂れているのは雄しべの葯(やく)、穂の上にちょっと見えている小さなブラシ状のものが雌しべです。



左の写真は、実が熟し、風に飛ばされるのを待つばかりの穂。穂はバラけている。(2013 11/5)

つまり、美しい白い穂として観賞しているのは、花が終わって、実が熟するまでの穂という事になります。



チャノキ（茶ノ木、別名チャ） ツバキ科、常緑低木～中木 花期；11～12月初旬

原産地はインド、ベトナム、中国西南部とされるが詳細は不明。

葉が緑茶や紅茶の原料となる。奈良時代に渡来したころは、薬用植物として扱われたが、鎌倉時代に本格的な喫茶の習慣が広まった。



(2014 10/20)

茶ノ木は5号棟北側ヒュウガミズキの植え込みの中に生えている。

花は、枝の途中に、短い柄でぶら下がるように下を向く。多数の雄しべが丸く小さなボールのようで、花弁がそれを包む込む感じの花。

実は翌年の11月頃に熟す。冬に行くと、低木の周りに種子が一杯落ちている。

ホトギス ユリ科 花期；9～10月 場所；東法面

東アジアを中心に約20種、そのうち12種が日本にある。変種も多く、山草家の注目の的になっている。この優雅な名前は、白地に紫の斑点を散りばめたその花色が、杜鵑(ほととぎす)の胸毛の模様に似ることからついた。

写真は 2016 10/4



写真で見てもお分かりのように、花被（花弁、萼）のすべてが、そして先端が三裂し大きくそりかえる雌しべまで紫色の斑点に散りばめられた花は、カメラを構えていてもめまいがしそうで、細部が分からないほどだ。

しかしながら、“華やかさはないが、心憎いばかりの渋さと魅力的な花”、“一茎を竹筒に挿して、侘び、寂びの境地にちょっぴり触れてみたり・・・”と『花の風物誌』と記されているように、この花が他の

植物の移植時に土とともに運ばれてきたものであっても、無視できない印象深さを感じる。

ムラサキシキブ クマツツラ科 落葉低木 花期；6～8月，実；10～11月

わが団地のムラサキシキブは8～9号棟北側法面に生えている。落葉低木で高さ3メートルほどになる木である。
(写真は2015/10/13)



ムラサキシキブと聞けば、あの『源氏物語』の作者、紫式部を思い浮かべるが、残念ながら直接関係はないらしい。『大人の園芸 庭木・花木・果樹』によれば、「江戸時代に実紫(みむらさき)の名前で流通していたが、商売上、紫式部のほうが美しいということでこの美飾名が広がり、人気が出たと言われている」と記されている。

コムラサキ クマツツラ科 落葉低木 花期；7～8月，実；9～10月 (写真は2015/9/22)



5号棟西側の生け垣の中にはコムラサキが生えている。花期も実もこちらのほうが一足早い。9月には紫の実を鈴なりにつける。本家ムラサキシキブより実はたくさんつけて美しい。園芸上はコムラサキをムラサキシキブとして売られているようだ。

【参考書】 『野に咲く花』『樹に咲く花』山溪、『花の風物誌』釜江著・八坂
『雑草のはなし』田中著・中公新書、『ネイチャー・カレンダー』平凡社新書、HP

【 様々な紅葉 10月 】



〔 撮影月日 〕

ウメ (14 10/30) カキノキ (14 10/30)
ケヤキ (16 10/24) サクラ (16 10/24)
ツタの幼木 (14 10/30)
トチノキ (16 10/15) ハナミズキ (16 10/15)

(写真・文 ; 石川)